

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 68 号 / 2026 年 3 月 / 編集：丸岡泰（石巻専修大学）

胡粉を用いた石巻市雄勝町の法印神楽にかかわる子供向けイベントの開発

丸岡泰（石巻専修大学）

本研究はこれまで宮城県の牡蠣の日本遺産への登録申請および、観光ルートとしての「宮城オイスターロード」を提唱してきた研究からの派生であり、胡粉を用いた石巻市雄勝町の伝統芸能雄勝法印神楽（国指定重要無形民俗文化財）関連イベントを提案する。東日本大震災で大きな被害を受け大幅人口減を経た雄勝町の神楽面には昔から胡粉が使われてきた。今日、子供たちが胡粉と神楽面に接する機会は少ない。そこで、AIによる天照大神のデザインを参考に、胡粉地上の福笑いの要素をもつゆるキャラ風神楽面の体験イベントを開発した。面には石ノ森章太郎作品類似品等への拡張も可能である。このイベントは経済的採算が見込め、実施者があれば成立する。

女川原発事故時の牡鹿半島（宮城県女川町、石巻市）からの避難路に関わる原発再稼働差し止め訴訟の高裁判決記録の分析

阿部剛、大和田尚典、丸岡泰（石巻専修大学）

石巻市住民 17 人の原告側が女川原発事故時の避難路不確実を理由に同原発再稼働の差し止めを請求した控訴審は、2024 年 11 月判決で棄却された。本研究はこの判決文の検討により、司法の女川原発事故の際の避難路の現状判断を評価した。避難計画では牡鹿半島は PAZ（原発から 5km 圏内）、準 PAZ（5～30km 圏内だが避難行動は PAZ に従う）、UPZ（5～30km 圏内）に 3 分され、自動車のない住民はバスで大崎市に避難する、となっている。原告側は避難時の渋滞発生や、放射線量検査所の設置の可能性を問題視している。過去の天災時の状況からすると、計画通りの避難ができない可能性はあるが、

判決文の「具体的危険の存在を主張立証する責任は控訴人らにある」の部分が、控訴棄却の論理になっている。

福島県浜通りにおけるサッカー振興策のスポーツウォッシングとの類似性に関する一考察

清田太陽、三浦尚穂、辺見亮太、近藤慶悟、佐藤大樹、
細井蓮、志田蒼汰、丸岡泰（石巻専修大学）

福島県浜通りには 2011 年の原発事故での住民避難と、以前からの東電・日本サッカー協会による J ヴィレッジを核とするサッカーの世界的先進地という 2 イメージが存在する。本研究はこれを「スポーツウォッシング」概念で理解する。その定義は「個人または政府、企業、もしくは他のグループが個人またはグループの評判、とくに議論の余地のあるまたはスキャンダルの中にあるもの、を向上させまたは磨き上げるための競技イベントの使用」（Britannica Money[2025.12.19 参照]）とされる。浜通りとスポーツウォッシングの典型例 2022 年サッカーワールドカップ開催地カタールを比較すると、サッカー利用、隠したい事実と資金源、競技水準とイベント水準の乖離の点で類似性がある。

ツーリズムと災害伝承施設：価値提供と継続性の課題

大嶋淳俊（宇都宮大学）

本研究の目的は、東日本大震災伝承施設が設立から時間を経て課題が増えつつあるという問題意識を背景に、東日本大震災以前の大規模災害を扱い、長期間運営されている雲仙岳災害記念館、人と防災未来センター、北淡震災記念公園・野島断層保存館の 3 館を比較分析することである。各施設の設立経緯、展示手法、防災教育機能、来館者推移、地域観光との接続のあり方を整理し、価値提供と継続性を検討した。分析の結果、3 館は同じ災害伝承施設でありながら、地理的背景、展示手法、語りの担い手、周辺観光との関係に違いが見られた。これらの結果は、災害伝承施設が長期運営で直面する論点を相対的に把握する上で、有効な比較視点を提供する。

『衣』から考える地域活性化

ファッションの潜在能力と観光行動の再評価

早坂健太、関颯太、阿部航成、丸岡泰（石巻専修大学）

ファッションを軸とした地域イベントのファッションショーや展示型企画には参加者や担い手が限定されやすいという課題があるが、フリーマーケットは、「見るだ

け」「立ち寄るだけ」の参加も可能であり、参加のハードルが低い点に特徴がある。先行研究においても、フリーマーケットは物品売買の場にとどまらず、人と人が緩やかに交流する社会的空間として機能すると指摘されている。集客不足や来場者層の固定化といった課題には、SNSによる情報発信や、地域店舗・団体との連携が有効である。ファッション・フリーマーケットは、地方都市において実現可能性が高く、地域活性化や観光行動の再構築に寄与する手法である。

復興のツーリズムからの観光教育についての一考察 —今後の研究計画、特に首都圏の教育旅行施設等に焦点をあてて—

青野也寸志（宮城県立支援学校岩沼高等学園）

東日本大震災関係の震災復興を踏まえ、復興のツーリズムにおける教育旅行等について、振り返りを行いながら今後の研究計画の考察を行った。研究結果および今後の課題としては、修学旅行文集テキスト化を目指すことである。具体的には、人と防災未来センターを含む関西（京都・大阪・神戸・奈良等）・広島・沖縄の修学旅行文集の分析を行う。また、復興のツーリズムに関連した教育旅行関係施設を考察することである。特に、全国各地のフィールドワークを通じた分析を行うことが必要である。さらには、震災復興を経験した地元企業の地域貢献についての考察である。以上のことについて、今後一層考察を続けていくことが重要であるとの結論に至った。

シェアサイクルを活用した街中観光の拡張

—山形市を事例にして—

山田浩久（山形大学）

地方都市では、定住人口の総消費額の減退を交流人口の消費で補完する様々な観光施策が実施されている。しかし、明確な目的がある郊外での行楽とは異なり、都心部での観光は短時間の街中散策であるため、旅行者の満足度を今以上に上げることは難しい。本研究では、街中の短距離移動手段として普及しつつあるシェアサイクルに着目し、街中観光に果たす役割を指摘した。山形市が2022年10月から運用しているシェアサイクル「ベニちゃり」の利用状況を精査し、都心部及び都心隣接部に存在する地域資源へのアクセスを明らかにしたところ、シェアサイクルを活用すれば、旅行者の観光範囲を拡大

し、かつ、移動時間を短縮することが可能になることが判明した。その結果、絶対的に不足している都心部の地域資源を都心隣接部のそれで補足しながら、テーマ性、ストーリー性のある観光を提案することができるようになった。

企業ミュージアムの観光化：

企業マーケティングと地域活性化

大嶋淳俊（宇都宮大学）

本研究の目的は、近年、企業ミュージアムが対外的なマーケティング施策として拡充されるとともに、地域の観光資源として活用される傾向に着目し、TOTOミュージアムとINAXライブミュージアムの2館を中心に比較分析を行うことである。各施設の設定背景、展示内容や体験機会の特徴、来館者推移、地域との関係性を整理し、観光化の視点で検討した。その結果、同業界の企業ミュージアムであっても、展示での力点や体験設計、地域文脈の違いにより、観光化と地域活性化への経路は異なることが確認された。これらの結果は、企業ミュージアムの観光化と地域活性化を検討する上で、展示・体験の設計および地域文脈に着目した整理枠組みを提供する。

被災地ツーリズムの課題と新たな視点

～東北の文化・精神性との融合～

柳津英敬（東北大学博士研究員）

東日本大震災から15年が経過しようとしている。震災の経験や教訓を広く国内外に発信し次世代に伝承していくため、被災地では震災伝承施設の整備や被災地ツーリズム等によるさまざまな取組が進められてきたが、各施設の来訪者やプログラムの参加者は減少し、持続可能性に対する懸念が指摘されている。一方で、震災後に被災地で見られた人々の秩序ある行動は世界から賞賛された。今後の復興過程においては、こうした東北に根付く文化や精神性に改めて光を当て、被災地ツーリズムとの融合を図りながら国内外に発信していくことで、震災伝承の質的高度化と復興の持続可能性を同時に高めていくことができる。

*12月20日の東北支部大会（オンライン）発表の要約。